

書評

笹原亮二編

『口頭伝承と文字文化―文字の民俗学 声の歴史学―』

小池淳一編

『民俗学的想像力』

野村 典彦

「口承」という便利な言葉に

不用意に寄りかからないために

*

意欲にあふれる二冊を併せ評せよと仰せつかった。しかし、のべ二十九名の論考を並べ評すには紙幅が限られている。そこで、本稿では、この二冊が目次の裏に秘めているところの、今日の口承文芸研究への問いかけを、私なりの理解によって表面に結像させて読解の一助を提供することとしたい。したがって、純粹な意味においての「評」とはなっていないことを、まずお断りしておく。

口承文芸研究の周辺に「口承」「書承」という言葉が用意されている。「口承と書承との往復」のように用いられる。まずは、柳田國男が『岩波講座 日本文学』に「口承文芸大意」を発表したのは一九三二年であるという具合に、多くの先学がその確認から始めてきたとおり、学問が今日に至るようになった節目を再度思い出しておきたい。文学が記載文学であることを自明とする学界への揺さぶりとして、「口承」と「文芸」という相反するような言葉が組み合わされたものが「口承文芸」だった。

文字の文学の大方こうを意識して用意された「口承」の対岸に、「書承」という語によって再び記載文学が表わされることの意味は顧みられてもよいだろう。

説話を学ぼうとする大学一年生の基本図書だった益田勝実『説話文学と絵巻』〔益田 一九六〇〕によって、戦後における「口承文芸」の享受を思い出しておく。一九五〇年代の文章をまとめたこの書の中で、説話文学は「口承の文芸と文字の文芸の出会い」という一節が輝く。もちろん、説話文学研究は貴族の説話を多く扱う。しかし、そうした中に益田は「とくに、日本古代文学史のかかわりあう範囲を、貴族文学、ないし都の文学に限定するのではければ、一步都を出はざれたところからは、口承の歌や話や語りごとのだけの文字のない世界であったから、それを無視するわけにはいかない」と述べた。益田より少し前、石母田正は「物語文学の作者にとっては貴族社会と都市社会が唯一つの現実であって、それを越えることがなかったために、彼らは現実の中に自己批判の媒

介となるべき本質的に新しい何者も見出すことが出来ず、従って宇津保と源氏を二つの頂点として、その後頽廢の一途を辿らざるを得なかった。しかし、『将門記』『陸奥話記』『今昔物語集』を評価する〔石母田 一九四六〕。益田は西尾光一の判断について単純すぎるといふが、「愚劣な、笑うべき、哀れな人間であり、時には幸福な、そして素朴な尊さをもった人間である。人間がそのようなものとして編者にとらえられたからこそ、『今昔』における説話発想の契機としての平俗性が、同書に文学形象化をもたらしした基本的契機となり得たのであった」〔西尾 一九四八〕という説話文学に対する発言は、文字を残してきた支配者の歴史を辿ろうとするのではなく、口伝えの文学から「人間」を見つめ直していかうとする姿勢の現れだった。ちなみに、『説話文学と絵巻』にも「書承」という言葉が使われていないわけではないが、「書承」の語を積極的に用い説話文学の発想・方法にせまつた西尾光一の記事は『中世説話文学論』（一九六三 塙書房）

に纏められている。「書承的契機をふくみながらも、口がたりの世間話を基盤とする多彩な説話蒐集を構成指標としつつ、人間や事件をいきいきと行動的に描出するところに、その文学としての形態や方法の基本線がおかれている」という構図だ。益田は『今昔物語集』の「編者の魂」をこうみる。「仏教自体が、かれにとつて、日常的な貴族社会的な世界を超えるものを求め望む契機でとらえられているのではないか、古代末の大きく下から押し上げてくる新しい階級の力の浸透を無意識の内に鋭敏に感じるところに、かれ（もしくはかれら）の仏法探求、そのために説話をよりどころとする傾向、それが世俗説話へ大きくはみ出し、展開していくことなどすべてを生む根源がありはしないか」。柳田の「口承文芸」を受容した戦後の説話文学研究の底辺に、「貴族」と対峙する「階級」についての議論があり、「庶民」がいきいきと行動する「人間らしさ」の追求があった。こうした「口承」観は、ひとつの共通認識を描く。もう一度だけ益田の言葉を引こ

う。「話は、それぞれに一定の構造・形象をそなえて伝承されていたのであり、その口頭伝承は、筆録される場合、その形をこわさない表現を、話の方が語りつぐ伝承者たちに要求しつづけていた」。

今日、口承文芸研究の中で用いられる「口承」「書承」の対比は、説話としての輪郭を明確にもった対象を受け渡す営みとして意識されており、「口承と書承との往復」は「話型」の足跡をたどっていく作業を基本として確認されてきた。^①「民話」でさえ五十年代の意味合いを忘れられかけているのだから、生い立ちを問う必要は、もはや無いのか。だが、手元の二冊の中で小池淳一は述べる。「単なる回顧や研究史の確認ではなく」「どういった意識や環境から民俗学を練り上げていったのかを具体的に掘り下げ、その過程で近代日本における民俗学の特質と可能性を考えてみようとした」（小池「民俗学史は挑発する」と）。

*

さて、この二冊は、いずれも純粋な「口

承」のみを伝承の理想とするような立場の書物ではない。そして、特に、伝承における文字の媒介、あるいは媒体の輻輳²⁾に高い関心を持って編集されたのが、笹原編著である。引用は別として、伝承と文字とを扱いながら（私の想像では意識的に）「書承」という用語を登場させない書物である。「口承」と言わず「口頭伝承」のことばが選ばれているところにもメッセージが込められているはずだ。

文字が厚く信仰される、文字についての口頭伝承が行なわれる、等等、この書においては「話型」を媒介したのが何者なのかという問題ではなく、文字は人々の生活のなかでいかに扱われてきたかというあたりが意識されている。「口承文芸研究」に掲載された論文では、川島秀一「『本読み』の民俗」（十七号・一九九四）、同「語り伝えと書き伝え」（十八号・一九九五）などが切り開いてきた伝承のありようである。

では、笹原亮二編『口頭伝承と文字文化』の目次を眺めよう。

はじめに―生活の中の文字―（笹原亮二）

第一章 「口頭伝承と文字文化」の位相

〈声〉からみた文字―日本列島における

歴史と民俗の領域から―（小池淳二）

民俗学と資料（笹原亮二）

第二章 メディア

疫神と呪符（大島建彦）

狐狸の書・神々の帳面―書記行為の民俗をめぐって―（小池淳二）

奥会津の番匠巻物―系譜・由来・呪い

歌―（宮内貴久）

近世の易占書―士君子の易・市民の易

と疾病・崇り・米相場―（井上智勝）

第三章 地域社会

近世後期村役人にみる文字文化と口頭

伝承―甲斐国巨摩郡河原部村平賀秀長

『拾集録』『後続日記』を素材に―（山

本英二）

巻物のある風景―三匹獅子舞の上演に

用いられる文書類の諸相―（笹原亮二）

近世における地域の伝説と旅行者―『西

国順礼略打道中記』を中心に―（青柳

周二）

第四章 歴史

「浮鯛抄」をめぐる文字と口頭の伝承

（川島秀二）

「近世的」職人由緒書の形成と展開―髪

結職由緒書を例として―（榎美香）

楯無鎧をめぐる伝承の実体化（西田か

はる）

書きとめられた伝説―地誌・郷土誌と

伝説集―（久野俊彦）

第五章 「口頭伝承と文字文化」の周辺

『コーラン（クルアーン）』とイスラム共

同体（ウンマ）―儀礼的音声言語の社

会的機能に関する言語情報学的考察―

（西尾哲夫）

疫神の詫び証文の伝播分布に関する情

報学的アプローチの試み―計量文献学

およびGISを用いて―（小田淳二）

「日本語の乱れ!?考」―現代の「若者言

葉」の動態をめぐって―（長崎伸仁）

『口承文芸研究』という機関誌の名に引

き付けてしまうなら、伝説を文芸の研究か

ら解放し、口伝えを扱う研究から解放し、

文字として歴史として、生活の中で扱われてきた身振りを見直そうとしている書物だ、と言うことも不可能ではない。第四章をみれば、これまでの口承文芸研究の積み重ねと決定的に断絶しているわけではないことがわかる。それでいて、この章に付された題は「歴史」である。

あるいは、大島が疫神託証文や疫神退散の差紙に注目するように、口承文芸の調査研究の中でも視野に入っていた文字を、記録としてではなく、信仰対象として、道具として、着眼していこうとする書物だと言うことも可能だ。

口承文芸研究が扱うものの中で、伝説は話型として整理することが難しい。したがって、伝説の周辺にあつては、呪符に対する場合と同様に、そう大きな違和感なく「文字の民俗学」を受け入れることが可能であろう。では、「口承」「書承」を説話文学研究から引き込んだきた昔話研究に「文字の民俗学」は可能なのであろうか。先ほど引用した「話の方が語りつく伝承者たちに要求しつづけていた」という具合の、「話の

方」を主語にした文章は、今日において許されまい。笹原編著の中では、小池「狐狸の書・神々の帳面」が「子守唄内通」を例として昔話の中に語られた文字に対する意識の抽出を試みている。そして小池は「狸和尚」の伝承によって「文字を書くしぐさ自体のあやしさ」に言及する。仮に「無文字」に拘りをもつ読者であったとしても、「読めないこと」―それは「読めない物が存在すること」でもあるだろうし、「語り手が文字を読めないこと」でもあるだろう―の意味を改めて考える上で、文字のある生活と向きあう必要が求められてくる。

*

一方、小池淳一編『民俗学的想像力』は、第六十三回歴博フォーラム「民俗学の行方」を母胎とする論集である。目次をみよう。

問題提起 民俗学史は挑発する（小池淳一）
I 民俗研究の構想
「常民」から「公民」へ―（政治改良論）としての柳田民俗学（室井康成）

民俗と世相―「烏詩なるもの」をめぐつて（山田巖子）

都市民俗学からフォークロリズムへ―その共通点と切断面（川村清志）

（コラム）柳田國男と家族（田中正明）

II 人と場

方法として見る民俗学者の人生（鶴見太郎）

町・職人・統計―小島勝治論序説（小池淳一）

「野」の学のかたち―昭和初期・小倉郷土会の実践から（重信幸彦）

敵の敵は味方か？―京大史学科と柳田民俗学（菊地暁）

（コラム）奄美研究への希求とその道程

III 対象と認識

―私的な回顧から（山下欣一）
社会的なるものへの意志―柳田國男の（郷土）（姜竣）

明文化・系統化される民俗―農村漁村経済更正運動初期における生活習俗の創造（和田健）
民俗芸術をめぐる想像力（真鍋昌賢）

展望

方法としての民俗学／運動としての民俗学／構想力としての民俗学（佐藤健二）

長くなるが、佐藤の文章を引用する。

たとえば、常民は「実体概念」か「抽象概念」か、遠野物語は「文学」か「民俗学」か、あるいはこの論文は「口承文芸」論であって、「社会伝承」論ではない、等々。（中略）つまり、ひょっとしたら無意味で無茶な組み合わせかもしれない問いかけの構成要素それ自体がもつ問題は問われず、そもそもそうした概念の配置において問うことといったい何が明らかになるのかの考察は、議論の対象から遠ざけられてしまう。

そして、佐藤は言う。「問いかたを問いなおし、ゆたかにすることが、「答え」にあてはまる証拠や説明を探すことより、時には大切な役割を果たすのである」と。

*

室井が政治改良の文脈を確認し、山田が世相批判という読みを試み、姜が地方改良への批判を浮き上がらせる。また、真鍋が「研究／批評／創作が混交したり分割されたりする、そうしたダイナミクスのもとに『民俗芸術』を捉える。『柳田の営為の精緻な読解と同時代的文脈を創造的に読み替えること』（小池「民俗学史は挑発する」）が行なわれていく。

口頭伝承と文字とを、右岸と左岸とに配置するのではなく、信仰に対して消費を不真面目とみるのではなく、「新たな意味の地平を創出する」（小池 同前）ことが、果たして口承文芸研究に可能なのか。これまでの研究の蓄積を活かしながら未来へと踏み出そうとする時に、話型による検索が容易に行なえる昔話研究の特殊性も視野に入ってこよう。関敬吾『日本昔話大成』第十一巻（一九八〇 角川書店）という「道具」の扱われ方も考えなければならぬ。

伝説については、手掛かりのひとつが示されている。笹原編著において久野は、『日葡辞書』以来の「伝説」の語、『椿説弓張月』以来の「口碑」の語の用例を確認し、柳田國男によって「伝説」の定義が整えられる以前の、緩やかな伝説観を掘り起こす³。久野は栃木県の事例によって、「口碑・伝説」が明治期に歴史資料として文字化され、後に編纂される伝説集の原型となった状況を明らかにしている。その背景に指摘される重要な契機が、小池編著において姜が問題にする地方改良運動である。

*

論集を併せ評せよという編集委員会の命は、確実に大きな流れとなりつつある新たな潮流の確認がねらいだったか。ここに見てきた二冊は、近年試みられた雑誌の特集として、『国文学 解釈と鑑賞』第七十卷十号（特集「創られる伝説 歴史意識と説話」・二〇〇五）、同誌 第七十三卷八号（特集「フォークロア研究の最前線」・二〇〇八）などに響きあう研究の展開だ。

あるいは、『日本學』第二十九輯（二〇〇九）東國大學校文化學院日本學研究所）に飯倉義之が「奥川青年会（採話）『むかし聞かせてくんなろ』稿」を報告していることなども思い出しておこう。一九七〇年代後半に西会津の青年達が「生活の一部として民話というものに取り組ん」だ（武藤一九七四）脱遺である。民話のこうした実践を「地域の新たな姿を模索する一環として、地域の文化の見つめなおし」民話、民俗への注目が集まっていた」と飯倉は整理している。

*

近現代史・近世史をにらみながら精密な検証によって組み立てられてゆく「人文学の地下水脈を掘り当て、そこからの再編を望もうとする営み」（小池「民俗学史は挑発する」）に、ひとつだけ問うてみたいことがある。書店に用意される「民俗学」の棚は、「近世」「近現代」の隣とは限らない。「古代」「考古学」の隣に位置させられる「民俗学」への根強い期待へはどのような応えてゆくべきだろうか。

最後に読者にも問いたい。「往復」を超え、文学的想像力によっても口承文芸研究の再編が企てられるべきではないのか。

【注】

（１）こうした研究の成果として、大島廣志『民話―伝承の現実』（二〇〇七）三弥井書店があげられる。

（２）こうした研究は、「（口承）研究」という名によっても積み重ねられてきた。山田巖子「口承―（口承）研究の展開―」（『日本民俗学』第二三九号（二〇〇四）を参照。

（３）地誌・郷土誌を分析する久野は「口碑・伝説」とナカグロを挟むけれども、一九三〇年前後を中心に案内記の類に目を通してきた私の判断では、柳田が伝説論を整える背景に「口碑伝説」という四字での流通も考えられてよい。一九三三年『日本文学大辞典』第二卷（新潮社）の「伝説」の項は、「木思石語」冒頭を繰り返す内容だが、柳田は「口碑伝

説といふ熟語が、我が国には行はれてゐる」と書き起こしている。

引用文献

石母田正『中世的世界の形成』一九四六
伊藤書店／『石母田正著作集』第五卷・一九八八 岩波書店

西尾光一「今昔物語集における説話的発想」一九四八・『文学』七月号／『中世説話文学論』（一九六三 塙書房）所収
益田勝実『説話文学と絵巻』一九六〇・三一書房

武藤道廣「民話と奥川青年会」『民話と文学』第六号 一九七九

（笹原亮二編『口頭伝承と文字文化―文字の民俗学 声の歴史学―』二〇〇九年一月、思文閣出版、本体七〇〇〇円）
（小池淳一編『民俗学的想像力』二〇〇九年三月、せりか書房、本体二八〇〇円）
（のむら・のりひこ／千葉大学非常勤講師）